巻頭言

甘藷との出合い

沖縄いもづるの会顧問　伊波（いは）　勝雄（かつお）

嘉手納町では、わが国への甘藷伝来400年の節目にあたる2005年、伝播者である野國總管の名を冠して「野國總管甘藷伝来400年祭」の記念事業が行われた。私は記念誌編纂部会部会長に任じられ記念誌発刊に着手した。この機縁が甘藷との出合いとなった。

記念誌編纂事業は、資料の探索から始めた。野國總管によって中国から伝えられた甘藷が、どのような経緯で日本各地に伝播し、人びとの生活にどういう影響を与えたかについて調べることにした。調査は７年にわたり、海を越え、種子島、鹿児島の山川、長崎の平戸、愛媛の大三島、島根の太田、京都、東京の目黒、埼玉の川越、千葉の幕張、対馬にまで足を運んだ。

調査地では、貴重な資料と多くの情報を得た。甘藷は、いずれの地域においても庶民が飢餓に瀕した際の救荒作物として救世主の役割を果たした。また、甘藷の伝播・普及奨励に尽力した人物を神様、仏様、甘藷先生として崇め、その恩徳を称え祀っている。その報恩の情は今に続き、感銘を受けた。さらには、鹿児島指宿在住の郷土史家は「沖縄の芋のおかげで山川の人びとの命が救われた。われわれは沖縄に足を向けては眠れない」と語っていたことも印象に残っている。こうした人・モノ・情報との出合いにより、2006年３月にはめでたく「記念誌野國總管」が発刊された。

甘藷伝来400年祭を契機に、2006年には甘藷のさらなる発展を図るため「沖縄いもづるの会」が結成された。会則には「わが国における甘藷発祥の地として、甘藷生産者、加工業者、研究者及び甘藷ファン等甘藷関係者の連携を図り、沖縄における甘藷の発展を図ることを目的とする」と謳われている。事業内容には、①甘藷に関する研究　②甘藷の発展に関するイベントの開催　③機関誌の発刊　④県内外の甘藷関係者との交流　⑤会員相互の親睦を挙げている。2009年には、沖縄いもづる会の発案で、沖縄県「いもの日」を制定した。いもの日を、毎年『11月16日（いいいも）』とし、沖縄県産いもの啓蒙及び消費拡大を図り、甘藷の付加価値を高める活動を展開している。今年は、20回目の開催を予定している。

さて、甘藷の本家本元である嘉手納町は、戦前は甘蔗や甘藷で生計を営む豊かな農村であった。戦後は町域の82％が米軍基地に接収され、町民は狭隘の地に暮らし、耕地が消えた。町づくりでは「耕す土地がなければ、頭を耕せ」という発想の元、野國總管の遺徳である「国際性」「進取の気象」「社会貢献」を学校教育目標に掲げ、その具現化を目指した人材育成に努めている。